

サムソンの最後の行動 ——『闘士サムソン』試論——

堀 内 直 美

『闘士サムソン』(*Samson Agonistes*, 1671) は、ジョン・ミルトン(John Milton, 1608-74) の最晩年の劇詩である。この世界における、様々な試練に耐える人間の生き方は、ミルトンの、三大作品における一貫したテーマである。この劇詩は、様々な批判や解釈がなされてきた。サミュエル・ジョンソン(Samuel Johnson, 1709-84) が残した、「中間部分が与えられず、また成り行きは、大詰めの破局を早めも遅らせもしない」(71) という名文に端を発し、これに対する議論が、現在でもなされている。その中で、バートン・ウェーバ(Burton J. Weber) は、「アーノルド・スタイン(Arnold Stein)、ジョウゼフ・サマーズ(Joseph Summers)、そしてアンソニー・ロー(Anthony Low) は、この劇詩の中間部分について、あまり明確な説明をしていない」と述べる(233)。それは、この劇詩がコロスの語りとサムソンの独白、そして彼を訪れる三人の訪問者との会話で物語が進行し、しかも神殿破壊という出来事が、使者によって伝えられるため、「行動」に欠けることによる。一方、ジョン・ウォール(John N. Wall Jr.) は、「この劇の中間部分の出来事が、劇の初めから終わりへ我々を連れて行く方法を描く」と述べ、独白と対話の重要性を指摘する(120)。人の行為は必ず何らかの意図によって行われる。しかしその意図は、必ずしも行為者によって常に明確に意識されているわけではない。この劇詩では、神殿破壊を行ったサムソンの意図は明確に記されず、サムソン自身も明確に意識しているわ

けではない。そのため、批評家は、サムソンを罪深さによる苦悩ゆえに、キリスト教的英雄の原型とするか、野蛮な復讐心に燃える悲劇的部族の長とするかで論争し、またサムソンの神が、彼を助けたかどうか曖昧な表現になっているため、メアリー・アン・ラジノヴィッチ (Mary Ann Radzinowich) や、ジョウン・ベネット (Joan Bennett) のように、サムソンは悔い改めたと考える者と、アイリーン・サミュエル (Irene Samuel) やジョウゼフ・ウイトリッチ (Joseph Wittreich) のように、サムソンは悔い改めていないと考える者たちの間で、様々な解釈を呼ぶことになったと思われる (Cable, 172)。

ミルトンが基にした原典は旧約聖書の中の「士師記」13-16章である。ユダヤの軍人で批評家のフラウイス・ヨセフス (Flavius Josephus, 37/38-c.100) の『ユダヤ古代誌』 (*Jewish Antiquities*, 93-94) も参照したと考えられる。またミルトンは、この劇詩にギリシャ悲劇風の形式を採用している。一方、三人の訪問者が訪れる筋立ては「士師記」ではなく、これは「ヨブ記」の形式に似通っている。ミルトンは、わざわざ父マノア、妻ダリラ、そして「士師記」に登場すらしない格闘家ハラファを創作し、サムソンのガザの獄舎へ訪ねさせている。「義人の嘆き」を扱う「ヨブ記」におけるヨブの嘆きと、『闘士サムソン』におけるサムソンとの嘆きには、形式的にも内容的にも大変似通った部分がある。ウォールは、「ミルトンが詩編の翻訳やヨブや預言の諸書の読書により、知っていたヘブライの詩の分野を、『聖書の嘆き』 (biblical lament) と呼び、主要人物の語りやこの劇詩の劇的な動きのために採用した」と述べる (117)。「聖書の嘆き」の形式は次の三つの内容から成っている。第一は「苦境の独白とその描写」、それは時に罪深さの告白を含む。第二は「敵達の名指しと非難」、第三は「無活動ゆえに神を非難し、神の行動を求める」ことである (Wall, 126)。一方、深層心理学の視点から、カール・グスタフ・ユング (C. G. Jung, 1875-1961) は、「人間の意識的な知性がたとえ盲目で無力であったとしても、無意識的な精神は正しく見て

いるものである」と述べ(41)、人間の意識に届かない次元から「ヨブ記」を考察している。

『闘士サムソン』においても神から啓示を受けた「義人の苦難」が描かれている。サムソンは神に対して罪を犯したが、「神への義」を貫こうとする。そのため耐えがたい葛藤にさいなまれている。三人の訪問者はそれぞれにサムソンの罪を告発し、彼を非難する。サムソンは神への信頼を捨てることを誘惑される。しかし彼は、彼らの誘惑を「神への義」によって退ける。本稿では「聖書の嘆き」の形式の観点から、『闘士サムソン』を「ヨブ記」に照らして、サムソンが最後の行動に至るまでの内面の変化を分析する。そしてサムソンの嘆きがヨブの嘆きを原型としていることを深層心理学的視点もふまえつつ、明らかにして行く。ミルトンが意図したのは、この「行動」に欠ける劇詩の独白と対話そのものにあるだろう。サムソンの嘆きと神の応答は、サムソンの破壊的行動の原因とも言えるからである。

I. 苦境の独白と罪の告白

初めに、この「聖書の嘆き」の形式の三要素に照らして、サムソンの最初の独白を見てみよう。『闘士サムソン』は盲目のサムソンが案内の手を頼み、「日向も日陰も選べる」(3)土手に座し、独白を始める場面から始まる。

A little onward lend thy guiding hand
To these dark steps, a little further on;
For yonder bank hath choice of sun or shade,
There I am wont to sit, when any chance
Relieves me from my task of servile toil,
Daily in the common prison else enjoined me,
Where I a prisoner chained, scarce freely draw
The air imprisoned also, close and damp,

Unwholesome draught: but here I feel amends,
 The breath of heaven fresh blowing, pure and sweet,
 With day-spring born; here leave me to respire. (1-11)¹

もう少し先まで案内の手を貸してくれ。／この見えぬ足取りに、いま少し先まで。／向こうの土手なら日向も日陰も選べる。／たまに奴隷の苦役から解放されることなどあれば、／私はそこに座るのが常。／ふだんは雑居房に閉じ込められて、鎖に繋がれた囚人の身。／獄舎のむしむし、じめじめ、不健康な空気さえ／自由に吸えぬ。だがここならほっとする。／夜明けとともに吹き始める、清々しく心地よい天の息吹が／爽やかに吹いている。ここでこのまま一息入れさせてくれ。

サムソンはペリシテ人に捕えられ、目をえぐられ、粉挽きの重労働に従事させられている。彼の独白は自分の誕生を嘆くことから始まる。「ああ、なぜ私の誕生が天使によって二度までも／天から予言されたのか？」(23-24)。この苦境は、神との約束、つまりイスラエルの民をペリシテ人から解放するという偉業を成し遂げるために、聖別された者としての自分の誕生を疑いたくなるからである。しかし、サムソンは自分に過ちがあることを自覚しているので、神を非難しない。サムソンは神への裏切りの罪を認識している。そのため、ただひたすら神を信じる態度を示し、「だが待てよ、性急に神の預言を／疑ってはならぬ」(43-44)、「だが黙れ！私はいと高き摂理を定める／神の御心と争ってはならぬ。私の賜物の中に、／神は恐らく私の計り知れない目的を定めたのかも知れぬ」(60-62)と言い、一見、神に望みを託しているように見える。しかし内心、神から見捨てられているのではないかという不安に捉えられ、絶望の淵にいる。自分の犯した罪ゆえに彼は、非難する相手は

1 詩の引用は John Carey's *Milton The Complete Shorter Poems* (Longman, 1977)、訳は佐野弘子訳『劇詩 闘士サムソン』(思潮社、2011年)による。

神でなく、自分自身という窮地に追い詰められている。サムソンは自分の苦しい境遇を、「私は光の中でも闇」(75)、「生ける屍」(79)そして「半死半生」(79)とみなしている。サムソンにとって神に見捨てられ、盲目にされ、自由を奪われ、苦役につけられている現在の状態は正に「暗黒」である。ミルトンはその状況を「暗黒」と「光」のイメージで象徴的に描写している。それは「この見えぬ足取りに、いま少し先まで。／向こうの土手なら日向も日陰も選べる」(2-3)や、「おお、暗黒、暗黒、暗黒。真昼の光の中でも、／取り戻せない暗黒、皆既日食、／昼の光を見る望みなし！」(80-82)の有名な一節に見られる。この箇所は、「光」を生、「暗黒」を死のメタファーと考えれば、サムソンの状況そのものである。サムソンの最後の言葉は、彼がすでに意識の上では死んでいると自分を認識していることを示している。

but O yet more miserable!

Myself, my sepulchre, a moving grave,

Buried, yet not exempt

By privilege of death and burial

From worst of other evils, pains and wrongs, (101-05)

だがおお、さらに惨めなことよ！／私自身が我が墓、動く墓石だ。／葬られているのに、まだ死と埋葬の特権によって、／諸悪の中で最悪の苦痛と／不当な罰から免れないでいる。

一方「ヨブ記」では、最初の独白である3章において、ヨブは苦境を語り始める。身に覚えのない災いに苦しむヨブは、延々とその誕生を死と結びつけて嘆いている。ヨブは財産を奪われ、ひどい皮膚病に犯され、自分の誕生の日と自己の運命を呪って述べる。「わたしの生まれた日は消えうせよ。男の子をみごもったことを告げた夜も」(3:3)。ヨブはその妻に「どこまでも無垢でいるのですか。神を呪って、死ぬ方がましでしょう」(2:9)とさえ言われたのに、神を信じ、疑わなかった

義人である。そして彼は「お前まで愚かなことを言うのか。私たちは神から幸福をいただいたのだから、不幸もいただくではないか」(2:10)と言い、自分の艱難を受け入れた。「ヨブ記」の筆者もまた「光」と「暗黒」のイメージで生と死を描いている、「その日は闇となれ。神が上から顧みることなく光もこれを輝かすな」(3:4)。またヨブは死にたくても死ねない状況を次のように述べている。

なぜ、労苦する者に光を賜り、悩み嘆く者を生かしておかれるのか。彼らは死を待っているが、死は来ない。地に埋もれた宝にもまさって死を探し求めているのに。墓を見いだすことさえできれば、喜び躍り、歓喜するだろうに。(3:20-22)²

上記の描写にはミルトンがサムソンの苦境に用いた表現との類似が見られる。「労苦する者に光」(20)、「死を待っている」(21)、そして「墓」(22)に含まれた「光」、「暗黒」、そして「墓」のイメージである。それらは死にたくても死ねない神に見捨てられた者の苦悩を切実に伝えている。

Ⅱ. 敵達の名指しと非難

次に三人の訪問者との対話を考察しよう。サムソンと最初に対話するのは父マノアである。ここでの父の役割は、父の立場から考えれば、力と威厳そして愛情で息子を救うことである。一方、息子の立場に立てば、贈賄により自分を安易な生活へ引き戻す誘惑者であり、「聖書の嘆き」の形式の観点からはサムソンの敵、すなわち非難者である。白髪で好々爺然としたマノアは、サムソンに対して、父親としての愛情から神の非道な行為を「おお、最も価値ある功績のために一度選んだ者を、／弱さゆえに過ちを犯したとはいえ、神はこれほどまでに打ちのめし、／

2 聖書の訳は「新共同訳 聖書 旧約聖書統編つき」、(日本聖書協会)による。29章18-20章のみ、関根正雄訳「ヨブ記」(岩波書店、1972年)による。

奴隷としてこれほどまでの忌まわしい侮辱を／受けさせるべきでない、とわしは思うのだ」(368-71)と非難する。この言葉は一見サムソンへの深い愛情と見えるが、その実、神を非難し、サムソンの神への信頼を揺るがすものである。サムソンも神を非難し、呪うことができれば、苦悩は少し和らぐ。ヨブの妻の言葉のように、これはサムソンの信仰の根幹を揺るがす言葉である。しかし、これに同調することは、自分の信頼を曲げることである。サムソンは、これに対して父を諫めることにより、神への義を保つ。

また、自分の罪により神から見捨てられたという不安と絶望の中で苦悩しているサムソンの前で、父は言う。「かくしてダゴンに栄光が帰され、／この神をおいて神は存在しない唯一の神は／偶像と比べられて、栄光を奪われ、冒瀆され、／酒宴の席で偶像崇拜者達に嘲られよう」(440-44)。マノアは、お前のせいで、神が冒瀆され、嘲られる、お前は一族の恥を招いた、とサムソンを精神的にさらに追い込んで行く。これに対してもサムソンは父の言葉を認め、自分の罪をひたすら悔い、自分の神が挑戦に勝つであろうと、神への信頼を再び口にする。さらに父は、父としての愛情から「わしはペリシテの高官たちに／接触してきた。お前の身代金について／交渉するためだ」(481-83)と言う。父はサムソンが十分苦痛と苦役に耐え、ペリシテの高官達も復讐心を満たしたことだろうし、お前には力がないから彼らも安心だろうと、サムソンの力を否定する。この父の言葉と行為はサムソンの無力を示し、存在意義を否定するもので、ますますサムソンを精神的に追い詰めることになる。

サムソンは辛うじて、身の安楽をもたらす釈放の労を取らないことを父に嘆願する。彼は悔い、自分の罪の償いをするを真剣に考えている。ここで父と息子の意識にずれが起こり始める。父は息子の望み通りに、悔いることを勧めるが、命を全うすることを前提としている。サムソンの方は、全身全霊で悔いることを望んでいる。つまり、サムソンに

とって命だけ、体だけ助かってでも苦悩が続くだけで、心の安寧はない。
彼は自己犠牲も辞さない覚悟である。父はさらに言う。

Who ever more approves and more accepts
(Best pleased with humble and filial submission)
Him who imploring mercy sues for life,
Than who self-rigorous chooses death as due;
Which argues over-just, and self-displeased
For self-offence, more than for God offended. (510-15)

神は（子として謙虚に従う者を最も喜ばれ）、／自分に厳しく死を甘んじて選ぶ者よりも、／慈悲を求め生命を乞う者を／常に良しとされ、受け入れられる。／死を選ぶなどとは行き過ぎで、神に対する罪よりも／己に対する罪のために、自己嫌悪に陥っている証拠。

父は、神に許しを請い願えば、神が憐れみをかけ、許し、故郷へ返してくださると考えている。サムソンをキリスト教的英雄とみなす解釈に従えば、マノアは、サムソンの絶望を象徴し、自己保存の誘惑で神への信頼を揺るがす者である。身を以て苦悩を体験しているサムソンは、ヨブがその友の弁論を素直に受け取れないように、父の言葉を素直に受け取れない。サムソンは、父の誘惑を断ることで神への信頼を貫いた。

ミルトンはサムソンの苦しみがヨブの皮膚病であるかのように、サムソンに語らせる。

My griefs not only pain me
As a lingering disease,
But finding no redress, ferment and rage,
Nor less than wounds immedicable
Rankle, and fester, and gangrene,
To black mortification. (617-22)
私の悲嘆は、長引く病のように／私を苦しめるばかりでな

く、／治療法が見つからぬまま、疼いて荒れまくる。／まるで治らぬ傷が／膿み、爛れ、腐って、／果ては恐ろしい壊死に至るのに似ている。

「ヨブ記」は、「サタンは主の前から出て行った。サタンはヨブに手を下し、頭のでっぺんから足の裏までひどい皮膚病にかからせた」(2:7)と記す。ミルトンも、サムソンを単に体の表面のみならず、内部まで腫れ物が広がり、心身共に壊死するがごとくに描写している。ここに至り、サムソンは「神から見捨てられた」(632)と確信し、神の救いは未だに見られず、「絶望のあまり失神、卒倒して」(631)、死を「唯一の治療薬」(630)と考える。またサムソンは「それほどに私の活力が萎え、／私の希望が打ち挫かれたと感じます。私の内なる自然が／その働きにすっかり疲れ果ててしまったのです」(594-96)と語る。これはまさに、ヨブがさらされている死への誘惑そのものと言える。義人ヨブが自分の義を問題にするように、サムソンも義を問題にしている。彼にとって、謙虚に罪を悔いている自分に神が答えてくださらないことが問題なのである。

次の対話者は妻ダリラである。ダリラの役割は再び妻の愛情で仕えることであり、サムソンの視点からは情欲と愚行の誘惑者であり、「聖書的嘆き」の形式の観点からは敵であり、非難者である。彼女はサムソンを騙した罪を認めて、許しを請いたいと次のように語る。

First granting, as I do, it was a weakness

In me, but incident to all our sex,

Curiosity, inquisitive, importune

Of secrets, then with infirmity

To publish them, both common female faults: (773-77)

私は先ず認めております、私の罪は弱さゆえだったと。／けれどこれはすべての女の宿命なのです、／好奇心が強く、

詮索好きで秘密を知りたがるのは。／そして同じ心の弱さから、口外してしまうのです。／共に女に共通の欠点です。ダリラはその罪を「女に共通の欠点」(777)と自己弁護した後、「あなたも心弱き女に秘密をあかすべきではなかったのです。……ですから、弱い者同士で語り合しましょう、／その弱さはよく似通った、いえ同質のもの。／あなたの弱さで私の弱さをお許してください」(783-787)とサムソンに責任を転嫁し、女に秘密を漏らしたあなたも弱い人であると決めつける。さらに彼女は語る。「それにもし愛—あなたは憎しみとお考えでしょうが—／愛ゆえの嫉妬から—それは人の心を強く揺するもの、／あなたに対して私の心も同じく揺れています—／私のしたことがそのためだとしたら、どうでしょう？」(790-93)。彼女は、「愛ゆえの嫉妬」(791)からでもあり、それは善意からなので許されてきた、だから「たとえ力であらゆる人に勝っても、／情容赦のない怒りで勝ってはいけません」(818-19)と論ず。弱さを盾にするダリラの言葉は、一見愛情に根差しているように見え、その実サムソンを非難するものである。これに対しサムソンは激怒しながらも「なんと言葉巧みにこの女魔術師は／己の罪を粉飾して、私の罪を咎めることか！」(819-20)と応じ、ダリラの誘惑をきっぱりと撥ね付ける。

ダリラは弱さと愛情を盾にサムソンの許しを得ようとしたが、拒絶され、徳と真理と義務のために罪を犯したのだと次の弁明をする。「私の国の役人や貴人がわざわざやって来て、／市民としての義務と信仰の絆を盾に／要請し、命令し、脅し、迫り、勧告し、……説得したのです」(851-57)。サムソンをキリスト教的英雄とする解釈では、ダリラは肉欲(lust)を象徴し、偶像崇拜の宗教と国家を象徴する。また彼女は縁りを戻し逃げることを誘う誘惑者である(Wall, 135)。サムソンはダリラの愛情が自分でなく彼女自身へ、祖国へ向いていることを非難し、「もし／お前の祖国が私の生命を奪うようなことをお前に求めたならば、／自然の法、民族の法に反する不当な要求であろう」(888-90)と言う。ダ

リラの弁に、サムソンは彼女の本性を見抜き、その詭弁を非難する。しかしサムソンがこれほどまでにダリラの指摘に憤り、非難し、彼女を遠ざけなければならなかった理由は何だろうか。それは、弱く、嫉妬深く、裏切り者の彼女に、自分自身が、自分の罪が投影されているからである。サムソンは女色に溺れた弱さを克服しなければならないと考えている。

サムソンがあえて敵であるペリシテの女、ダリラを妻としたその意図は何か。「士師記」では「父母はこれが主のご計画であり、主がペリシテ人に手がかりを求めておられることが分からなかった。当時、ペリシテ人がイスラエルを支配していた」(14:4)とあり、この劇詩ではエシュタオルとツォルアの谷から出てきた友人達が同じことを問い、サムソンは「両親は／私の求婚が神意によるものであることを知らなかった。／私には内なる衝動から分かっていた。だから／その結婚をせがんだのだ。それを機に、／始められると思ったのだ、イスラエルの解放、／私が神から召された使命を」(221-26)と言っている。ダリラの場合も「同じ目的」(232)と言っている。つまり士師としての目的を果たすために異教徒の女達に近づいた。これはサムソンのみならず、「ホセア書」のホセアにも言える。「ホセア書」は「主がホセアに語られたことの初め。主はホセアに言われた。『行け、淫行の女を娶り淫行による子らを受け入れよ。この国は主から離れ、淫行にふけているからだ』」(1:2)と記す。

コリン・ゴッドバウト (Colin Godbout) はこのダリラの役割について「彼女の役割は『大淫婦』(Rev. 17)の役割である。つまり『偽りの宗教』(872)である」と述べる(32)。ミルトンは、サムソンをしてダリラを「女魔術師」(819)と呼ばせ、「お前の美しい魔法の杯と歌の魔力」(934)、「魔の力」(935)、「お前の魔術」(937)と言わせている。また彼はサムソンに彼女を「毒蛇」(763)、「蝮の知恵」(936)、「蝮」(1001)とも呼ばせている。「ヨハネの黙示録」で、大淫婦が「地上の

王たちはこの女とみだらなことをし、地上に住む人々は、この女のみだらな行いのぶどう酒に酔ってしまった」(17:2)と記されているように、ダリラは「正反対の内なる棘」(1037-38)となり、思い上がらないようにさせるどころか、「あるいは魅力で／男を邪道に引き入れ、情痴で／奴隷とし、分別を奪って／愚行と醜行にいたらせ、自滅させる」(1040-44)女であった。ここでは、イスラエル人とペリシテ人の、神ヤハウエと異教の神ダゴンの対立がはっきり見られる。ダリラはサムソンの勧めにもかかわらず、祖国とダゴンの神を捨てなかった。彼女は、捨てないどころか「士師記」(4:17-22)で歌われているカナンの王ヤビンの將軍シセラを殺したヘベルの妻ヤエルのごとく、「エクロン、ガザ、アシュドド、ガドでは、／最も有名な女達の中に数えられ」(981-83)たいと望んでいる。

サムソンの立場に立てば、心の弱さと知恵の足りなさがこの不幸を招いているので、同じ言葉が自分を再びさらなる「貶め」(999)と「愚行を重ねさせる」(1000)誘惑の言葉として響く。ミルトンはこの劇詩で、サムソンの知恵の欠如が愚行の原因であるとしている。サムソンの盲目は内面の知恵のなさを暗示する。知恵は、コロスが「いと高き知恵の測り難き配剤が／もたらすものを疑うことがあるが、／最後は常に最善とわかる」(1746-48)と語るように、神を象徴している。ミルトンはサムソンに「おお、強い肉体に宿る心の弱さよ！／力に倍する知恵がなければ、力は／何の役に立つのか？」(52-4)、「知る術は見ることでなくやってみることだろう」(1091)と語らせている。「やってみる」“taste”に当たる言葉は文字通りには「味わう」である。「士師記」はサムソンが獅子から出ている蜜を味わう体験を基にした謎を「サムソンは言った『食べる者から食べ物が出た。強いものから甘いものが出た。』彼らは三日たっても、このなぞが解けなかった」(14:14)と記す。ミルトンは『失樂園』9巻で、この言葉を「知恵」“sapience” (797)、「味覚」“taste” (1017)、「知恵」“savour” (1019)と用いている。ラテン語で

は'sapere'は「味わう」と「賢くある」を意味し、その派生語'savour'は「味の良さ」と「英知」を意味し、フランス語の'savoir'「知る」、「できる」を意味する（Fowler, 529; Godboud, 28）。「ヨブ記」でも知恵は、神への道を象徴し、このように語られている。

では、知恵はどこから来るのか 分別はどこにあるのか。すべての命あるものの目にそれは隠されている。空の鳥にすらそれは姿を隠している。滅びの国や死は言う、「それについて耳にしたことはある。」その道を知っているのは神。神こそ、その場所を知っておられる。・・・神は知恵を見、それを計り それを確かめ、吟味し そして、人間に言われた。「主を畏れ敬うこと、それが知恵 悪を遠ざけること、それが分別」。(28: 20-28)

「ヨブ記」28章で、ヨブは身に覚えのないヤハウエの横暴な迫害に対して知恵に救いを求める。「箴言」8-9章で知恵は「知恵の勧め」として語られる。ユングによれば、知恵にはギリシャの影響が見られ、「ソフィア（神の知恵）」、「完全に永遠なるもの」、「創造に先立って存在するもの」、「実体化された女性的プネウマ（霊）」であり、ヘブライの知恵文学のホクマー、インドのシャクティを連想させる（42-43）。知恵は旧約聖書で神の知恵として語られているが、新約聖書では「ヨハネによる福音書」のロゴス（神の言葉）と同じ性質を持ち、神から賜る聖霊となる。また知恵は、ヨブが強く求めたもので、ヨブが知恵を求めたように、サムソンにも知恵が必要である。ミルトンは内容的に一致する知恵への言及をこの劇詩に歌い込んだ。ダリラの誘惑にサムソンは「私はお前の魔術からわが耳を守るくらいの／虻の知恵を学んだのだ」（936-37）と述べて、彼女の誘惑を退ける。

最後の訪問者はガトの巨人ハラファである。ハラファは彼の立場に立てば挑戦者であり、サムソンにとっては力に頼む傲慢への誘惑者、「聖

書的嘆き」の形式の観点からは敵であり、非難者である。ハラファはサムソンの過去の「勇猛な行動」(1101)を数え上げ、もしそこに居れば自分はサムソンに勝てただろうと言い、サムソンの自尊心をくすぐる。さらに彼の怒りと戦意を煽るような侮辱的な言葉を吐く。ハラファのサムソン訪問の真の目的は、戦うことではなく、嫉妬心からサムソンに神から授かった力が本当にあるのかどうかを確かめることである。ハラファは「お前の神が何者であれ、頼らぬがいい。／彼はお前を顧みず、認めず、民から／断ち切って、敵の手中に／引き渡した」(1156-59)と言い、サムソンの義に関わる問題を示し、サムソンの神への信頼を揺るがす。ハラファは「一ペリシテ人」(1099)として「割礼を受けた者」(1100)であるサムソンに敵対する立場である。サムソンが頼む神はイスラエルの生ける神であり、ハラファの神は偶像ダゴンである。これに対しサムソンは、神から科されたこれらの禍は自分の罪ゆえに正当なもの認め、「神の最終的な許しについては絶望していない」(1171)と自分の神への信頼を語る。

神への義を貫いているサムソンに、ハラファは最後通牒ともいうべき言葉を突き付け、「お前の神にそこまで敬意を捧げるとは大したもんだ、／神がその大義を守るためにお前を受け入れると信じるとは、／人殺し、謀反人、強盗のお前を」(1178-80)と言う。この言葉はサムソンを激怒させる。「士師記」での自分の過去の行為を考えれば、サムソンはハラファの弁を否めないからである。サムソンは懸命に自分が解放者としていかに働いてきたか、しかしイスラエルの民は受け入れなかった、と自己弁護する。しかし弁明の果てに下した結論は、自分の犯した罪ゆえに今の自分があるということである。サムソンの密かな希望をハラファは無惨にも打ち砕く。まだ応えぬ神にサムソンは見捨てられている思いをますます深めることになる。

ハラファは武力による挑戦者であるというよりも、サムソンを中傷する非難者の面が勝っている。サムソンの自尊心をくすぐり憎悪を煽る。

キリスト教的英雄の解釈によれば、ハラファは傲慢を象徴し、神に頼むよりも、自分の力に頼むことを誘う誘惑者である。また彼は偶像崇拜の宗教を象徴する。ハラファはサムソンの内面に潜む傲慢を映している。過去に彼が行ってきたことは、傲慢の罪そのものである。サムソンは怒り、力に頼み、次の言葉を浴びせる。

Go baffled coward, lest I run upon thee,
Though in these chains, bulk without spirit vast,
And with one buffet lay thy structure low,
Or swing thee in the air, then dash thee down
To the hazard of thy brains and shattered sides. (1237-41)

失せろ、恥かきの臆病者め、たとえ鎖に繋がれても、／図
体ばかり大きくて意気地なしのお前に飛びかかり、／一撃
でお前の体をはり倒すか、／空中で振り回してから叩きつ
け、／脳味噌を潰して肋骨をへし折るほどの目に遭わせて
やるから。

この言葉は、文字通りには、サムソンのハラファに対する挑戦の言葉である。しかし、これは、過去の力に頼んでいた自分そのものであるハラファを、打ち消したい今のサムソンの心境を語っているとも言える。しかし、サムソンは「力は力によってまこと放逐される」(1206) ことを知っている。サムソンは、今の苦境は自分を捕えたペリシテ人である「お前たちの力のせいではない」(1219) と言い、「人も知るあの罪」(1218)、力がどこに宿るかを洩らしたことが、自分を無力にしていると認めている。力は知恵を欠けばただの傲慢と化す。サムソンは、虻の知恵により、単なる力の無力さを学んだ。そしてハラファを退けることによりこの力に頼む傲慢に打ち勝った。

サムソンとハラファの戦いで、ハラファはサムソンの力に頼む傲慢を煽り、信仰を躓かせる誘惑者であった。サムソンは怒りを掻きたてられ、自分を映すハラファの姿に挑む、しかし、これは奇しくも彼を過去

の自分の罪の認識に至らせた。サムソンは過去の自分を鏡のごとく映すハラファを粉々に打ち砕きたかった。だが力に頼まず、知恵による罪認識により、自分の過去を清算する怒りと闘志でハラファの誘惑を退けた。

Ⅲ. 神への非難と要求

「ヨブ記」において、ヨブは友への弁明の形で、神へ訴える。諦念やニヒリズムに陥ることなく、神の前で自己を主張して言う。「わたしの
上から御手を遠ざけてください。御腕をもって脅かすのをやめてください」(13:21)。ヨブは自分の義を貫くためにその高い倫理観で神に抗議した。ヨブのこの態度は神に対する反抗で、神に訴え、神に挑戦することは人間の分を越えたことである。反面、それはどんな時にも神に向かって叫ぶ、自分の義を主張するというヨブの信仰の表現でもある。関根正雄は、「ヨブの苦闘は自身の応報思想を前提しつつ、そのために神の不当と見える扱いに抗議をし、応報思想を乗り越え、それによって宗教における幸福主義の問題を超克したもの」(225)と述べる。他方、並木浩一は、「神はヨブの神義論的な問いを歯牙にもかけず、創造者と被造者としてのヨブとの力比べの問題へと土俵をすり替えているように見える」(342)と述べ、ヨブ記は「人間を含む被造世界に対する神の秩序の保持、共在、統治という、神の『摂理』の要件を備えた書物である」(350)と解釈する。さらに、カール・バルト(Karl Barth)は、「ヨブは、ただの一飛びで、神学的に極めて徹底的に教えられた者・悔い改めた者となり、したがって宇宙のあらゆる自主性に順応するだけでなく、またそのような自主性に対して自分には何の権限もないことを承認するだけでなく、神の自由に対して自分の分に安んじた」と主張する(149)。「ヨブ記」をいかに解釈するかは大問題である。しかし本稿の主眼ではないので、『闘士サムソン』ではっきり示されていないサムソンの意図と神の応答に関する理解を助ける例を、二、三挙げるに止めた。これらはサムソンの内面の変化を裏付ける。サムソンは、自己の利

益のために神を信ずるのではなく、神のために神を信じている。また彼は創造者と被造物である自分との違いを認識していた。そしてサムソンは悔い改めようとしているのである。

さらに「ヨブ記」は、この劇詩のさらなる原型的要素を備えている。関根は、「ヨブの苦闘はルターの場合と同じく怒りの神の奥に恵みの神を発見することことにあった」(225)と述べる。これはヨブに艱難をあたえている「敵なる神」ではなく、死後にヨブが自分の義を証拠立ててくれる「贖い主」として見る「友なる神」のことである。ユングは「この書〔ヨブ記〕が成立した時点ですでに、ヤハウェの矛盾に満ちたイメージを・・・描き出す証言が数多く存在した。・・・分別と無分別とが、慈悲と残忍とが、創造力と破壊の意志とが隣り合わせに並んでいた」と述べる(13)。また並木は「外なる自己〔体〕が滅びた時に、ヨブが神と出会いを果たすとすれば、それを可能にするのはこの内なる自己の存在である。・・・ヨブが二重化されるに伴って、彼に現れる神も二重化〔祝福した神と攻撃する神〕した」と説明する(322)。ユングによれば、ヨブの素晴らしいところは、「神の一体性を見誤ることなく、神自身が自らと矛盾していることを、しかも彼ヨブが神の中に神に対して彼を助け弁護する存在のいることをはっきりと見ている」ことである(17)。「ヨブ記」で、ヨブが「敵なる神」の仕打ちに救いを求めた「友なる神」は、パラクレート(弁護者、助け主)の教義の根拠となり、「箴言」からさらに時代が下り、聖書外典「知恵の書」で、知恵はソフィアの霊的な性質とインドのマーヤー(現象世界)の世界を形成する者としての性格を強め、天の高みから遣わされる「聖なる霊」(9:17)となる(46)。そして新約聖書の「ヨハネによる福音書」(14:15-31)では「聖霊を与える約束」がされ、知恵は「弁護者」と言われ、神がイエスの名によって遣わされる「聖霊」となる。「ヨブ記」でヨブが求めた知恵は、ミルトンの劇詩で、サムソンも求め、「聖霊」として彼を照らすことになる。

『闘士サムソン』における、サムソンの神はヨブの神のような弁明で答えない。ヨブの神は旧約聖書の神ヤハウェである。ミルトンは「士師記」を基にしており、サムソンの神は表面的にはヨブの神と同じである。しかし、ミルトンの描くサムソンの神は、ミルトンが17世紀に生きて、内乱を体験し、身に付けた様々な思想や知識を基にして描いている神である。ミルトンは原典として「士師記」や「ヨブ記」を用いた。もちろん彼のテーマと似通った、あるいは利用できる内容を持つので、それを借用した。それゆえ『闘士サムソン』のサムソンの神は、三位一体の面を持つ。ミルトンは、なかなか答えない神を「詩編」の言葉を引用して、「神は時に御顔を隠すようだが」(1749)とコロスに語らせる。しかし旧約聖書では、ジョン・ショークロス(John T. Shawcross)が語るように、「詩編」(88:15)でも「申命記」(31:16-18)でも、ヤハウェとの契約を破り、姦淫を犯し、偶像崇拜に走るような民に対して、ヤハウェは怒り、御顔を隠される。「士師記」でも「イスラエルの人々は、またも主の目に悪とされることを行ったので、主は彼らを四十年間、ペリシテ人の手に渡された」(13:1)と記されている。サムソンも神の目に悪しきことを行ったため、彼に対する神の怒りは激しく、神はなかなか彼に御顔を現されなかった。

この劇詩の山場は、サムソンが、力業を強要したペリシテの高官達の頭上に神殿の柱を押し倒し、屋根を落とし、自分を巻き込む大惨事を引き起こすことである。ギリシャ悲劇ではカタストロフィが目撃した使者によって伝えられるように(佐野, 110)、使者が父マノアとコロスのいる所へ惨劇を伝えて終わる。サムソンは、この苦悩から解放されるためには死を覚悟していた。父の希望に対して、彼は次のように答えている。「私には全く別の予感がします、／この暗い眼球は二度と光に与ることはなく、／生命なるもうひとつの光も長くは続かず、／二重の闇黒に屈する日も間近であらうと」(590-94)。

では力技へ及んだサムソンの意図は何か。「士師記」で、サムソンは

「わたしの神なる主よ、私を思い起こしてください。神よ、私に今一度だけわたしに力を与え、ペリシテ人に対してわたしの二つの目の復讐を一気にさせてください」(16:28) と語る。一方『闘士サムソン』では、マノアが「自害か? どんな理由で／それほど素早く自分に刃向かったのか?」(1584-86) とも、「おお、最後に己自身に強すぎた!／お前は恐ろしい手段で復讐を果たしたな」(1590-91) とも語る。またコロスは「おお、高い代価を支払ったが、栄光の復讐!」(1660) と、「士師記」の言葉をその後に引用しつつ語る。ショークロスは、「読者は正当な理由によるのではなく、自殺願望を伴う聖書のいう復讐による行為に気付いている」と述べる(191)。つまりミルトンは復讐自殺説をコロスにそれとなく語らせている。しかしミルトンの真意は単にそれだけではなく、劇詩の原典である聖書の話を敷衍したものを付け加えることであつたろう。ペリシテの高官らに依頼された力業を承諾する時、サムソンは語る。

Commands are no constraints. If I obey them,

I do it freely; venturing to displease

God for the fear of man, and man prefer,

Set God behind: which in his jealousy

Shall never, unrepented, find forgiveness.

Yet that he may dispense with me or thee

Present in temples at idolatrous rites

For some important cause, thou need'st not doubt. (1372-79)

命令は強制ではない。命令に従うなら、／私は自由にしたがる、敢えて／人を恐れて神を怒らせ、人を優先させて／神を後回しにする。これでは神の嫉みを蒙り、／悔い改めない限り、許しは得られないだろう。／しかし何か重大な理由により、私や君らが／神殿で偶像崇拝の儀式に列するのを、／神が許し給うことを疑う余地はない。

初め、ペリシテの高官の依頼で、役人がサムソンを探しに来たとき、サムソンはその依頼を断る。しかしミルトンはサムソンに「悔い改めない限り、許しは得られないだろう」(1376)と考えさせ、「しかし何か重大な理由により・・・神が許し給うことを疑う余地はない」(1377-79)と思い直させ、「何か心を突き動かす衝動」(1382)を感じたと語らせる。ゴッドバウトは、初めに断り、それから悔い改めを認識し、「衝動」を感じて承諾したことは、「再生した心が律法への挑戦の行為の必然を認めたことであり、聖霊の促しである」と解釈する(28)。他方、ショークロスは、「ミルトンがサムソンに過去の自分自身を、また過去の自己を思い出させるものを乗り越えさせている」と主張する(200)。つまり力に頼む傲慢さ、女色に溺れる弱さ、そして人殺し、謀反人、強盗の過去の行為を悔い改めているということで、悔い改めはサムソンの再生には不可欠である。

「士師記」のサムソンとは違い、『闘士サムソン』のサムソンは、使者が高官らの力技の依頼に来た時、すでに自分に力が蘇っていることを自覚し、「あの大きな過失のあと、髪の毛と共に／再び蘇ってきている神聖な賜物であるこの力を／みだりに用いてよいものか」(1354-56)とコロスに問うている。彼は自分の神が自分の悔い改めを認めて、再び力を与えてくださっているのに、ペリシテ人の言いなりになり、再びペリシテの神に仕えることを厭っている。この逡巡を打ち砕いたものこそ、「何か心を突き動かす衝動」(1382)である。上述のように、ゴットバウトはそれを「聖霊の促し」と解するが、ショークロスはこの劇詩は「恩恵」(grace)を問題にしていると言う(193)。コロスはミルトンが用いている原典に従って「イスラエルの聖なる方(the Holy One)を／君の導き手とされよ」(1427-28)と言う。それは、「イザヤ書」(1:4; 10:20)で預言者イザヤが神を指す言葉で、旧約聖書の神の導きであることを示す(佐野, 103注)。ミルトンの描く神は、表面的には原典として用いた旧約聖書の神とならざるを得ないが、内容的には、徐々に新

約聖書の神へ収斂していく。そのため、両者の解釈はいずれも妥当と思われる。またサムソンが自殺を望んでいないことは、次のサムソンの言葉が示している。「これがわが最期か否か、私にも分からぬ」(1426)。

この劇詩で「われらが生ける畏れるべき神」(1673)は、神を蔑ろにする民に怒り、「彼らの破壊者を急ぎ召し出させた」(1678)。神はサムソンを召し出され、彼に応えられた。コロス小隊は語る。

So fond are mortal men
Fallen into wrath divine,
As their own ruin on themselves to invite,
Insensate left, or to sense reprobate,
And with blindness internal struck. (1682-86)

死すべき人間はかくも愚かなり、／神の御怒りに触れれば、
／わが身に破滅を招き／分別を失い、邪念に駆られ、／内
なる盲目に打ちのめされる。

御顔を隠されていた神は、あたかも「サムソンと一緒に歩いて敵に破壊をもたらした」(Shawcross, 129) かのようである。「邪念に駆られ」“reprobate”(1685)という言葉は「ローマの信徒への手紙」に「彼らは神を認めようとしなかったので、神は彼らが無価値な思い(reprobate mind)に渡され、そのため、彼らはしてはならないことをするようになりました」(1:28)と記され、神に背く人々の行為を暗示する。神が民に要求することは、神への服従と信頼である。神に背き、放縦にふける者は「内なる盲目」“blindness internal”(1686)に導かれて死に定められている。

サムソンは罪人である。神に背き、罪を犯した弱き人間である。それはコロスがサムソンの知恵の足りなさを指摘していることから分かる。「何か心を突き動かす衝動」(1382)を「聖霊」と解したゴッドバウトは、「聖霊の衝動はサムソンが『いとも不活発と思われた時にいとも活発になる』(1704-5)という逆説を説明する」と述べる(28)。知恵

は新約聖書の「ヨハネによる福音書」14章（聖霊を与える約束）で「真理の霊」（14：17）、「弁護者、すなわち、父がわたしの名によってお遣わしになる聖霊」（14：26）と記され、イエスを信じ、それに倣う者らに神から贈られた。この劇詩でも、神は苦悩の中で自己の罪を悔いているサムソンを認めて「聖霊」を遣わされた。

ミルトンは『キリスト教教義論』（17章）で「人が呪われ神の怒りを蒙った後、恩恵の状態へ至らせられるのは人の刷新による」と述べる（*CPW VI*, 453）。これは、『闘士サムソン』のサムソンの苦境からの救いに影響している。彼は、「エフェソの信徒への手紙」を引用し、「心の底から新たにされて、神にかたどって造られた新しい人を身に着け、真理に基づいた正しく清い生活を送るようにならなければなりません」（4：23-24）と強調し、さらに「テトスへの手紙」を引用し、「この救いは聖霊によって新しく生まれさせ、新たに造りかえる洗いを通して実現したのです」（3：5）と説明を加えている（*CPW VI*, 453）。ミルトンは「聖霊」により、人が「再生」、「刷新」されるとしている。またミルトンは同書（18章）でこの「再生」について説明する。「再生は古い人が破壊され内面の人が神の思い、言葉、御意志によって再生されることを意味する。そのため人の心は全てあたかも新しい被造物であるかのように神の似姿へ戻される。さらに魂と肉体である人のすべては神への奉仕と良き行いへ捧げられる」（*CPW VI*, 461）。これらの議論は明らかに新約聖書の「愛の神」の慈悲と恩恵により、「聖霊」が遣わされ、サムソンが「刷新」（Renovation）され、「再生」（Regeneration）したことを裏付けている。

ミルトンはサムソンの再生、力の復活を不死鳥のイメージで次のように描いている。

But he though blind of sight,
Despised and thought extinguished quite,
With inward eyes illuminated

His fiery virtue roused
From under ashes into sudden flame,
And as an evening dragon came,
Assailant on the perched roosts,
And nests in order ranged
Of tame villatic fowl; but as an eagle
His cloudless thunder bolted on their heads.
So virtue given for lost,
Depressed, and overthrown, as seemed,
Like that self-begotten bird
In the Arabian woods embossed,
That no second knows nor third,
And lay erewhile a holocaust,
From out her ashy womb now teemed,
Revives, reflourishes, then vigorous most
When most unactive deemed,
And though her body die, her fame survives,
A secular bird ages of lives. (1687-1707)

だが彼は盲目の身となり、／蔑まれ、力を全く奪われていたと思いきや、／内なる眼に照らされて、／灰の下から火の力を奮い起こし、／突如焰と燃え上がらせた。／あたかも蛇が夕暮れ時に這い出して、／飼い馴らされた農家の家禽たちが／整然と並ぶ止まり木や巣を／襲うがごとく、しかも鷲が／家禽の頭に晴天の霹靂を撃つがごとく。／そのように力は失われたと諦め、／沈み、倒れた、と思われても／アラビアの木にひそんで／自ら生まれ、／第二、第三の同類を知らぬあの鳥のごとく、／少し前に燔祭として捧げられたのに、／自らの灰を胎として生まれてくるあの鳥

のごとく、／蘇り、再び栄え、いとも不活発と／思われた
 ときにいとも活発になり、／肉体は死すとも名は残る、／
 永世の鳥として、代々生きる。

さらに、ミルトンは『キリスト教教義論』17章で「エフェソの信徒への手紙」を引用し、「わたしたちの主イエス・キリストの神、栄光の源である御父が、あなたがたに知恵と啓示と霊を与え、神を深く知ることができるようにし、心の目を開いてくださるように」(1:17-18)により、「心の目」へ言及している。さらに、「コリントの信徒への手紙二」を引用し、『闇から光が輝き出よ』と命じられた神は、わたしたちの心の内に輝いて、イエス・キリストの御顔に輝く神の栄光を悟る光をあたえてくださいました(4:6)と述べる(CPW, VI, 457)。これらの聖句は、「心の目」が開かれた者は「知恵と啓示と霊」を与えられ、「心の内」に「光」を宿す者は、「神の栄光」を悟ることができると解釈できる。ここで歌われている「内なる眼」“inward eyes”(1689)はまさにこの「心の目」であろう。サムソンにはこの「心の目」が開かれた。またサムソンは行動を起こす時、「私は自由に従う」(1373)と語っていた。同様に、ミルトンは「フィリピの信徒への手紙」の「あなたがたの内に働いて、御心のままに望ませ、行わせておられるのは神であるからです」(2:13)を引用し、神が自由に行動する力を与えておられると述べている(CPW VI, 457)。並木浩一は「神が直接に支配する領域はこの外部世界であり、人間世界ではない。・・・神はヨブの内部世界に立ち入らない。ヨブの内部は彼の意志の支配領域として確保される」と解説する(343)。神が力を与えて、人間の行動の自由を与えているので、サムソンは自由意志に従って行動すると思われる。

ストルマン(S. S. Stollman)は、ラビ教の伝統においてサムソンと「蛇」の結び付きを述べる、また'dragon'は一般的には「大蛇」や「ニシキヘビ」を意味する(Carey, 411注)。ここの「蛇」“an evening dragon”(1692)は、サムソンを暗示していると思われる。他方、「不死鳥」は

400年生き、巢とともに自分を焼いて蘇る。またしばしばキリストの復活と靈魂の不滅を象徴するとも言われている（Carey, 411注）。『ヨブ記』の筆者もこのイメージを用いている。

私は思った、「わたしはわが巢とともに滅び、不死鳥のようにわが日を長くしよう、わたしの根は水に向かって開かれ露は夜の間にわたしの枝に宿るであろう、わが栄えはいつもわたしのもとにとどまり わが弓はわが手にあっていつも新しい」と。(29:18-20)

この詠嘆について関根は、「過去の幸を神からの祝福として新たに見直し、それ故『誇張』が出てきているのである。ヨブは自分を神の祝福の荷い手として一種の救済者、メシア的存在に擬している」と解説する(200-01)。これは、ヨブの本来の姿にそぐわないが、ここではサムソンとヨブの「復活」を強調するために、用いられていると思われる。ミルトンの場合は常にヨブ詩人のイメージをさらに一層豊かにしている。

以上、『闘士サムソン』におけるサムソンの独白と三人の訪問者との対話を、「ヨブ記」におけるヨブの独白と神との対話に照らし、「聖書的嘆き」の形式に則して考察した。サムソンとヨブは同じような苦境、「義人の苦難」にありながら、サムソンは初めから自分の罪を認識して悔い改めたいと願っていた。それに対して、ヨブは身に覚えのない罪で因果応報を盾に責める三人の友に非難され、自分の義のために神に反抗し、最後になって「敵なる神」の威嚇で神の全能を認識し、恐れから無意識に黙り、悔い改めて神を賛美した。サムソンは神に反抗せず、応えぬ神に不安と絶望を感じていた。彼の嘆きは神から疎外された人間の訴えである。嘆きは、人間の力で神からの分離を修復できない者が人間の限界で出来る最後の手段である。サムソンは、三人の訪問者、特に父マノアと妻ダリラの一見愛情に根差しているように見えながら、実は非難の言葉を、また闘士ハラファの嘲りの言葉をそれぞれ退けた。マノアは

恥じ入らせることにより、ダリラは弱さを指摘することにより、ハラファは力に頼む傲慢を煽ることにより、サムソンを怒らせた。しかしそのことは反面、彼を刺激した。彼らは、サムソンが「刷新」、「再生」するために乗り越えることが不可欠なサムソン自身の罪を象徴していた。サムソンは神への信頼を揺るがす彼らの誘惑をすべて拒絶し、神への忠誠を通した。そのため、「愛の神」の恩恵により聖霊を遣わされ、「刷新」、「再生」され、「心の目」を開かれた。『闘士サムソン』でミルトンは、「士師記」と「ヨブ記」を原型として用いながら「義人の苦悩」に焦点を当てた。彼は聖書中の人物を脚色して肉付けし、「聖書的嘆き」の形式に近い独白と対話で劇的な展開を生んだ。そしてサムソンの最後の行動に至る内面の変化を、独白と対話により読者に伝え、内なる光であるイエス・キリストに導かれる人間サムソンの生き方を示して見せた。

引用文献

- Cable, Lana. *Carnal Rhetoric: Milton's Iconoclasm and the Poetics of Desire*. Durham and London, Duke University Press, 1995.
- Godbout, Colin. "Samson's Agon with Dagon: Action in Milton's Divine Tragedy." *Thought Currents in English Literature* 73 (2000) AGU: 1-36.
- Johnson, Samuel. "Lives of the English Poets" by Samuel Johnson. Ed. Hill George Bricbeck. New York: Octagon Books, 1967.
- Milton, John. *The Complete Shorter Poems*. Ed. Carey, John. London: Longman, 1997.
- . *Paradise Lost*. Ed. Fowler, Alastair. London: Longman, 2007.
- . *Complete Prose Works of John Milton: Volume Six*. Ed. Kelley Maurice. Trans. Carey John. New York: Yale University Press, 1973.
- Shawcross, John T. "Misreading Milton". *Milton Studies* 33 (1997): 181-203.
- Wall, John N. "The Contrarious Hand of God: *Samson Agonistes* and the Biblical Lament." *Milton Studies* 12 (1976): 117-139.
- Weber, Burton J. "The Schematic Design of the Samson's Middle." *Milton Studies* 22 (1986): 233-54.
- 佐野弘子訳 『劇詩 闘士サムソン』、思潮社、2011年。
- 関根正雄訳 旧約聖書 「ヨブ記」、岩波書店、1972年。
- 並木浩一、勝村弘也訳 『旧約聖書 XII ヨブ記 箴言』、岩波書店、2004年。

カール・バルト 井上良雄訳 ゴルヴィツァー編 『キリストの証人ヨブ』、新教出版社、1997年。

カール・グスタフ・ユング 林道義訳 『C.G. ユング ヨブへの答え』、みすず書房、1992年。

参考文献

- Burns, Norman T. "'Then Stood up Phinehas': Milton's Antinomianism, and Samson's." *Milton Studies* 33(1997): 27-46.
- Goekjian, Gregory F. "Suicide and Revenge: *Samson Agonistes* and the Law of the Father." *Milton Studies* 26 (1990): 253-70.
- Gorman, Thomas M. "The Reach of Human Sense: Surplus and Absence in *Samson Agonistes*." *Milton Studies* 39 (2003): 184-215.
- Lewalaki, Barbara Kiefer. "Milton's Samson and the 'New Acquist of True [Political] Experience'." *Milton Studies* 24 (1988): 233-51.
- Lieb, Michael. "'Our Living Dread': The God of *Samson Agonistes*." *Milton Studies* 33 (1997): 3-25.
- Lochman, Daniel T. "'Seeking Just Occasion': Law, Reason, and Justice at Samson's Peripety." *Milton Studies* 26 (1990): 271-88.
- . "'If There Be Aught of Presage': Milton's Samson as Riddler and Prophet." *Milton Studies* 22 (1986): 195-216.
- Loscocco, Paula. "Not Less Renown'd than Jail": Heroic Chastity in *Samson Agonistes*." *Milton Studies* 40 (2004): 181-200.
- MacCallum, Hugh. "*Samson Agonistes*: The Deliverer as Judge." *Milton Studies* 27 (1991): 259-90.
- McDonald, Henry. "A Long Day's Dying: Tragic Ambiguity in *Samson Agonistes*." *Milton Studies* 27 (1991): 263-83.
- Milton, John. *Complete Poems and Major Prose*. Ed. Merritt T. Hughes. Indianapolis: Odyssey Press, 1981.
- Mustazza, Leonard. "The Verbal Plot of *Samson Agonistes*." *Milton Studies* 23 (1987): 241-58.
- Pounds, W.E. "On the Genealogy of John Wesley's Miltonism." *Thought Currents in English Literature* 85 (2012) AGU: 29-59.
- Swaim, Kathleen M. "The Doubling of the Chorus in *Samson Agonistes*." *Milton Studies* 20 (1984): 225-245.
- Shawcross, John T. *The Uncertain World of "Samson Agonistes"*. D. S. Brewer, 2001.
- Weber, Burton. "The Worldly End of Samson." *Milton Studies* 26 (1990): 289-309.
- Werblowsky R. J. Zwi. *Lucifer and Prometheus: A Study of Milton's Satan*. London, Routledge & Kegan Paul, 1952.
- West, Robert. "Samson's God: 'Beastly Hebraism' and 'Asinine Bigotry'." *Milton Studies*, 12

(1976): 109-129.

Wood, Derek N.C., "Aristotle, The Italian Commentators, and Some Aspect of Milton's Christian Tragedy." *Milton Studies* 29 (1992): 83-104.

新井明訳 『ミルトン 楽園の回復 闘技士サムソン』、大修館書店、1982 年。

金子武蔵 『フロイティズム—無意識と意識—』、清水弘文堂、1963 年。

鈴木佳秀訳 『旧約聖書 IV ヨシュア記 士師記』、岩波書店、1998 年。

滝沢正彦解説注釈 『ミルトン 闘士サムソン』、研究社、1996 年。

原田純訳 ミルトン著 『言論・出版の自由 アレオパジティカ 他一篇』、岩波文庫、2008 年。

湯浅泰雄 『ユングとキリスト教』、人文書院、1978 年。

ヨランダ・ヤコービ 高橋義孝監修、池田紘一、石田行仁、中谷朝之、百溪三郎共訳、『ユング心理学』、日本教文社、1973 年。